東郷遺跡第37次発掘調査一般公開資料

1991年8月25日（日）

調査地　大阪府八尾市本町１丁目95・ 2丁目112－１
調査期間　平成３年６月３日～９月30日
調査面積　3177m²（東区－2432m²、西区－745m²）
調査機関　財団法人　八尾市文化財調査研究会

●はじめに

東郷遺跡は、八尾市中央部の本町・北本町・光町・桜ケ丘一帯の東西0.9km、南北1.0kmの範囲に広がる弥生時代中期（約2000年前）から鎌倉時代（約800年前）に至る複合遺跡です。地理的には旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地に位置しています。

本遺跡は昭和46年に東本町で行われた水道管埋設工事の際、奈良時代の墨書人面土器が出土したことから遺跡であることがわかりました。その後、昭和55年に桜ケ丘３丁目で発掘調査が実施されたのを始めとして、昭和56年以降には近鉄八尾駅の移転に伴って、駅の北側を中心に小規模な開発が数多く実施され発掘調査の件数も増加しました。現在までに36次におよぶ発掘調査が実施された結果、弥生時代中期から鎌倉時代に至る遺構・遺物が多数見つかっています。なかでも、近鉄八尾駅の北側一帯では、古墳時代前期の居住域や墓域がみつかっており、当時の「ムラ」の移り変わりや大きさが明らかになってきました。

今回の発掘調査は、八尾市の市庁舎の建て替え工事に先立って（財）八尾市文化財調査研究会が平成３年６月３日から実施しているものです。

調査地位置図

●調査概要

調査地は道路を挟んで東西に二分されており、旧市庁舎跡を東区、旧税務署跡を西区と区別しました。東区では２面（上面－第１面、下面－第２面）の調査を行いました。西区では現在、第１面の調査を実施しています。今回、一般公開を行いますのは、東区の第２面と西区の第１面です。

◆東区

東区は現地表下２ｍ前後までは、昭和25年と昭和32年の旧市庁舎の建築により大半が攪乱を受けていました。 調査区内に残っている杭は旧市庁舎の基礎杭で、約800本が打ち込まれていました。

第１面　【飛鳥時代（７世紀）・平安時代後期（12世紀）】

第１面は現地表下2.4m前後（標高6.6m前後）の灰色粘土上面で飛鳥時代の溝４条（ＳＤ－101～ＳＤ－104）・水田12筆（Ｓ－10Ａ～Ｓ－10Ｌ）・自然河川１条（ＮＲ－101）、平安時代後期の井戸４基（ＳＥ－101～ＳＥ－104）が見つかりました。

・溝（ＳＤ－101～ＳＤ－104）

溝は４条見つかりました。ＳＤ－101・ＳＤ－103は自然河川の流路に併行するもので、ＳＤ－102 はＳＤ－103から分流して北に伸びる溝です。ＳＤ－104は水田の畦畔を切る溝で、水田が埋まった後に掘られた溝です。

・水田（Ｓ－10Ａ～Ｓ－10Ｌ）

水田は調査区の西部一帯で12筆が見つかりました。水田は上幅0.2m、基底幅0.6m、深さ0.1m前後の、断面の形状が「かまぼこ」形をした畦畔で区画されたもので、面積は最大のもので100m²前後を測ります。水田面は南東側から北西側に向かってゆるやかに傾斜しており、約0.1mの比高差があります。 また、水田には水を取り入れるための水口が無いことから、この比高差を利用して南東側の水田から順番に水を引くことで、全体の水田に水がいきわたるような灌漑水利の水田であったことが考えられます。なお、これら水田はＳＤ－103 の西側に併行して伸びる道路状遺構（幅５～７ｍ）に直交する形で造られていることから、ＳＤ－103 は水田と同時期に存在したもので、これらの水田の灌漑水利に役割を果たしたものと考えられます。水田の上面には細砂～粗砂を主体とする水成層が堆積しており、洪水によってこれらの水田が埋まり、水田としての機能が停止したものと考えられます。

・自然河川（ＮＲ－101）

調査区の東部で見つかりました。南東から北西方向に流路をもつもので、幅15m以上、深さ２ｍ前後を測ります。河川の内部は粒子の粗い砂粒が堆積していました。このことから、この河川は規模が大きくて、しかも流れの比較的速い河川であったことが考えられます。河川からは弥生時代後期から奈良時代の遺物が出土しました。出土した遺物や河川の切り込み面から見て、古墳時代後期以降の河川で、奈良時代には完全に埋まってしまっていたようです。

・井戸（ＳＥ－101～ＳＥ－104）

調査区の東部で４基見つかりました。いずれの井戸も、井戸枠に容器として使われていた曲物を積み上げています。井戸の上部は攪乱により無くなっており下部のみが残っていました。なお、平安時代後期の遺構は上部が攪乱されているため、比較的深く掘られた井戸のみが発見されましたが、断面の観察結果では、現地表下1.2m 前後にこの時期の生活面があったことが判りました。ＳＥ－102からは、瓦器椀が出土しています。

第２面　【古墳時代後期（６世紀）】

第２面は第１面から約0.4m下部の暗青灰色粘土上面で検出しました。 調査の結果、古墳時代後期の水田２筆（Ｓ－20A・20B）、自然河川１条（ＮＲ－201）が見つかりました。

・自然河川（ＮＲ－201）

調査地のほぼ中央部を南東から北西方向に伸びるもので、幅６ｍ前後、深さ１ｍ前後を測ります。内部から古墳時代後期の遺物が少量出土しています。

・水田（Ｓ－20Ａ・20Ｂ）

自然河川（ＮＲ－201）の南東部で見つかりました。ＮＲ－201の流路に沿って造られたもので、Ｓ－20Aは東西5.5m、南北7.5mの規模があります。Ｓ－20Ｂについては南東部分が第１面の自然河川（ＮＲ－101）によって切られているため、本来の大きさは不明です。

◆西区

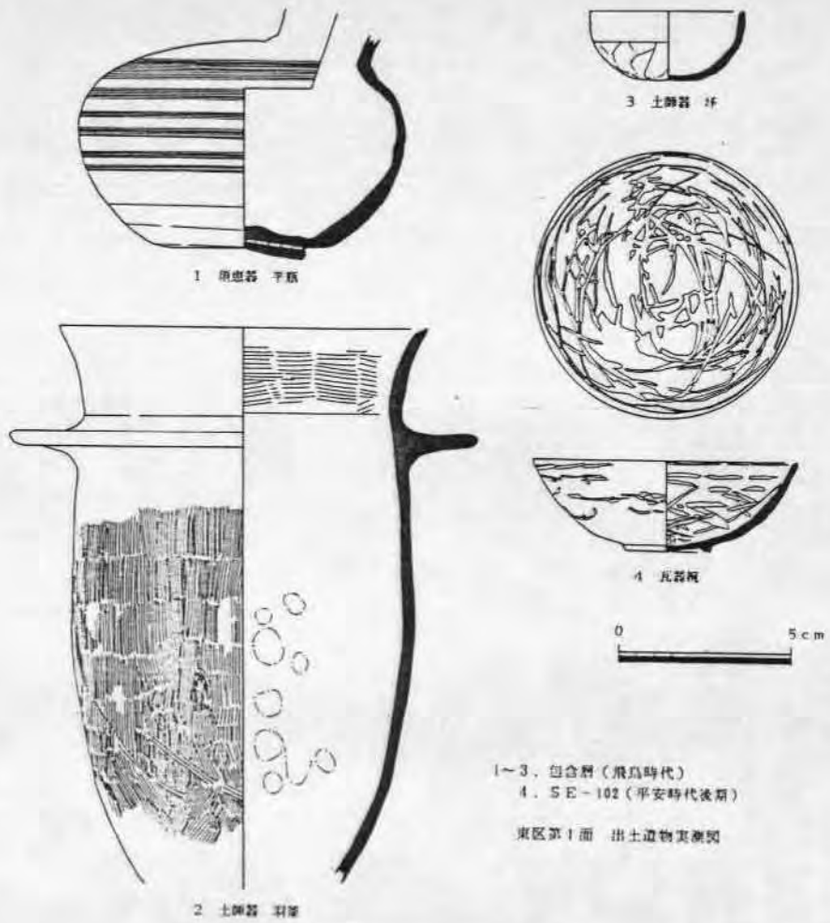
第１面　【江戸時代後期～昭和初期】

第１面は現地表下1.6m前後（標高7.5m前後）で、江戸時代後期から昭和初期に至る井戸４基（ＳＥ－101～ＳＥ－104）、土坑15個（ＳＫ－101～ＳＫ－115）、溝８条（ＳＤ－101～ＳＤ－108）、竹筒暗渠２ケ所が見つかりました。井戸は４基（瓦枠井戸２基・木枠井戸２基）見つかりましたが、いずれも農耕用に使われたものと思われます。15基見つかった土坑も大半が浅いもので、内部に植物遺体が残っているものが多いことから、堆肥等が置かれていた跡と考えられます。以上のことから、第１面の検出遺構は畑であったようで、個人所有の畑の隅に井戸が掘られていたことが明らかになりました。

●まとめ

東区では２面にわたる調査を実施した結果、 古墳時代後期の水田２筆・ 自然河川１条、飛鳥時代の水田12筆・溝４条・自然河川１条と平安時代後期の井戸４基が見つかりました。古墳時代後期の遺構については、調査区の南250m 地点で行われた調査（市教委－昭和56年）で居住地が見つかっており、この居住地に伴う水田であろうと考えられます。飛鳥時代の遺構についても、調査区の南350m 地点で行われた調査（SH82－１）で居住地が見つかっており、この居住地に伴う水田と考えられます。以上のことから、古墳時代後期から飛鳥時代にかけては、本調査地は水田として利用されており、この水田を管理した人々の居住地が南部一帯に広がっていたものと思われます。平安時代後期の遺構については、調査地の北400m で行われた調査（TG91-34）で見つかっており、この時期の集落が広範囲に広がっていたことが考えられます。

西区では江戸時代後期以降の畑地が見つかっており、畑地内の利用方法を知るうえで貴重な資料と言えます。

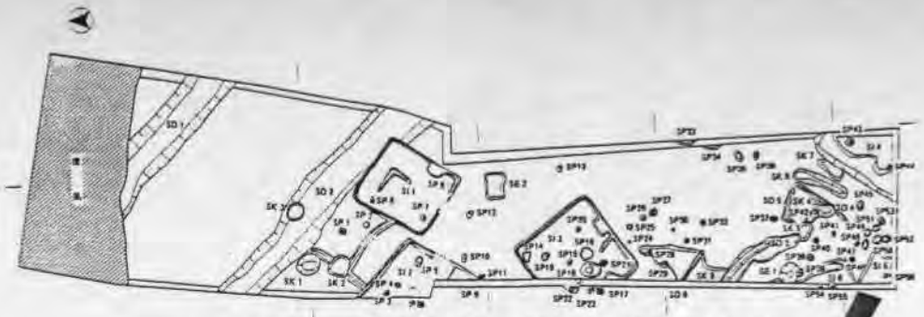


1～3．包含層（飛鳥時代）
4．ＳＥ－102（平安時代後期）

東区第１面　出土遺物実測図

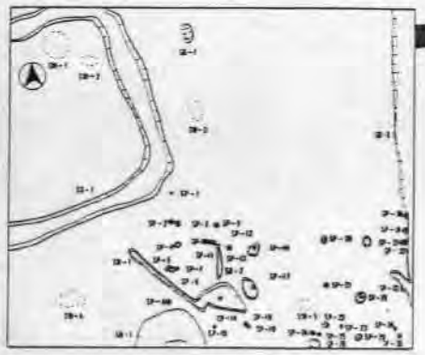
［　メ　モ　］

本調査地周辺でのおもな発掘調査

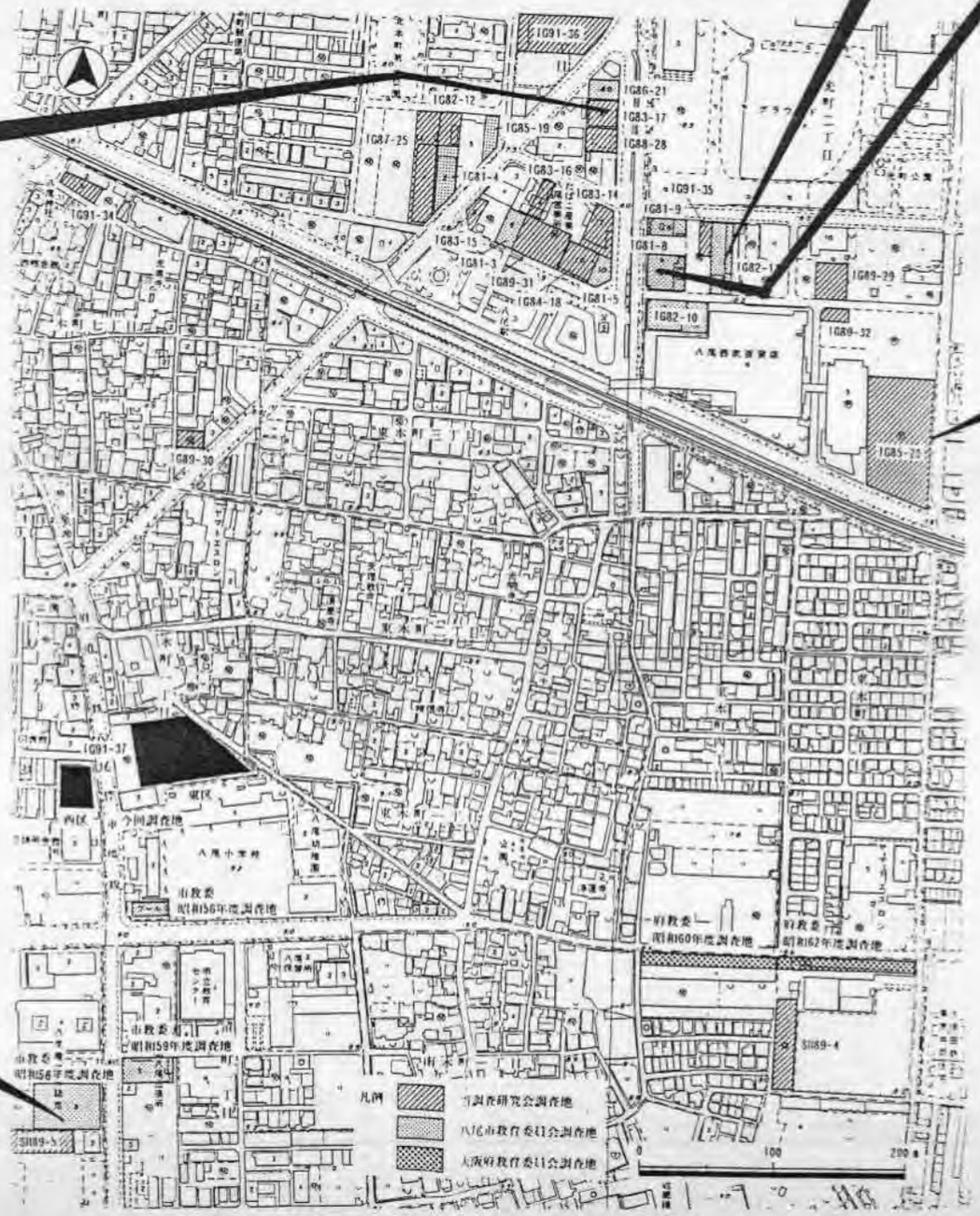


TG82-11 古墳時代前期の居住地 （縮尺1/400）

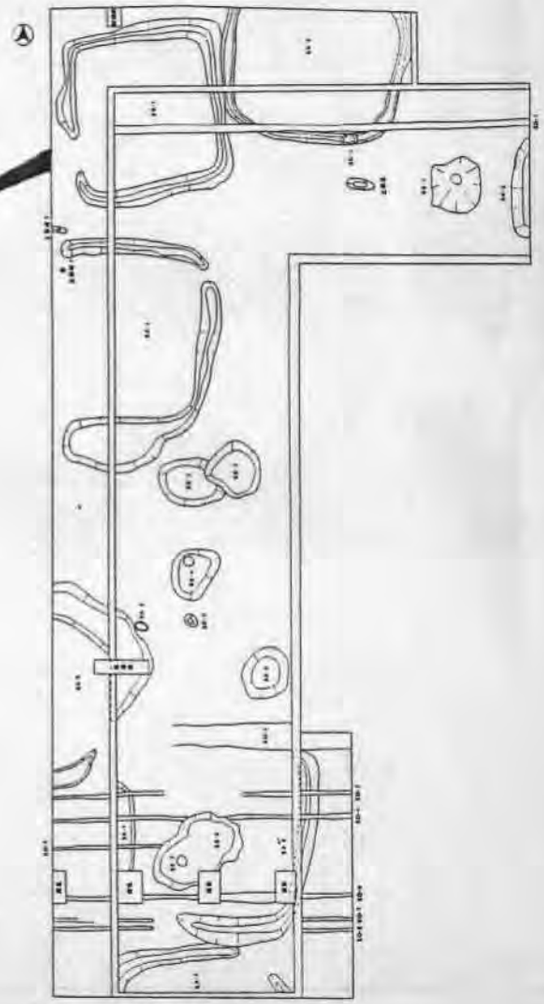
TG81-8
古墳時代前期の居住地（縮尺1/400）



TG83-17
古墳時代前期の墓地
（縮尺1/400）

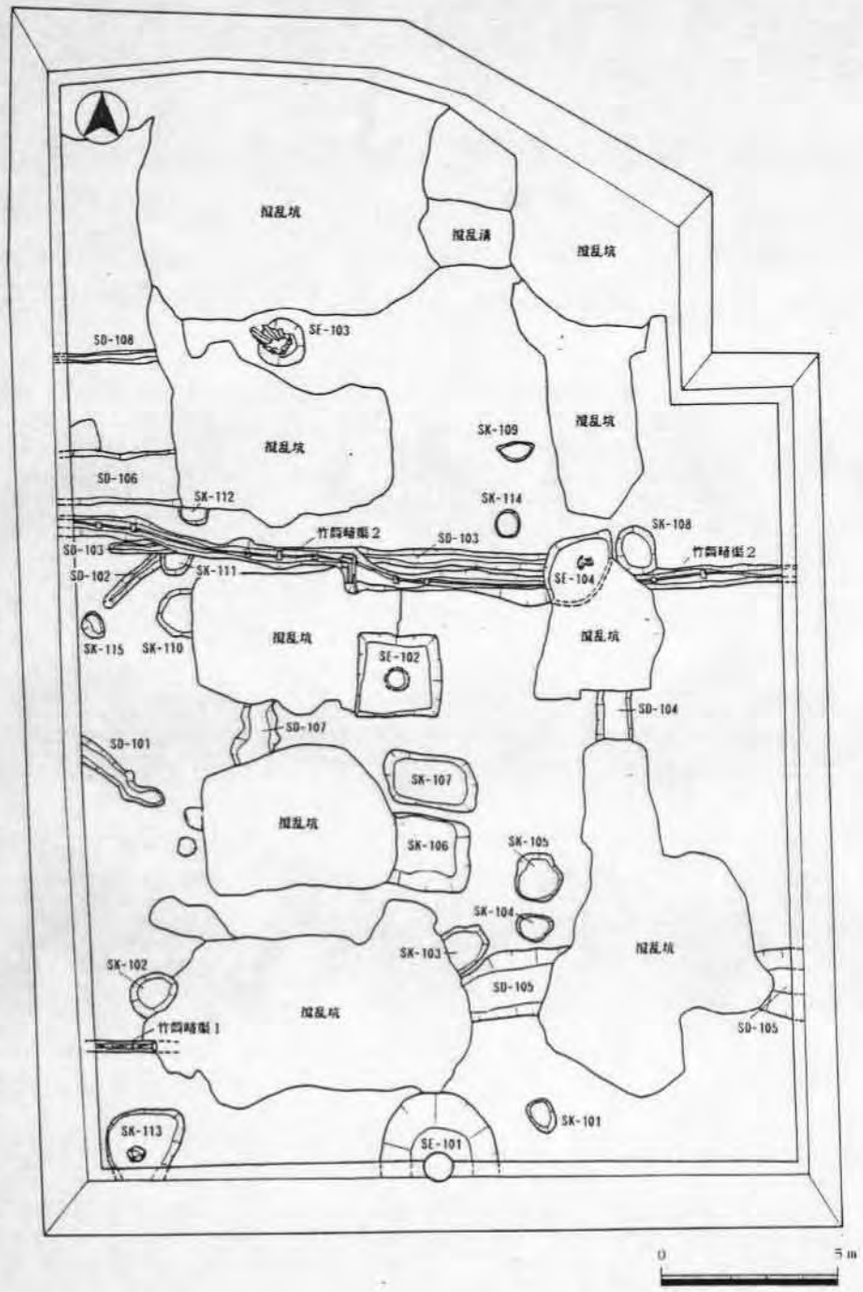


調査地周辺での発掘調査位置図

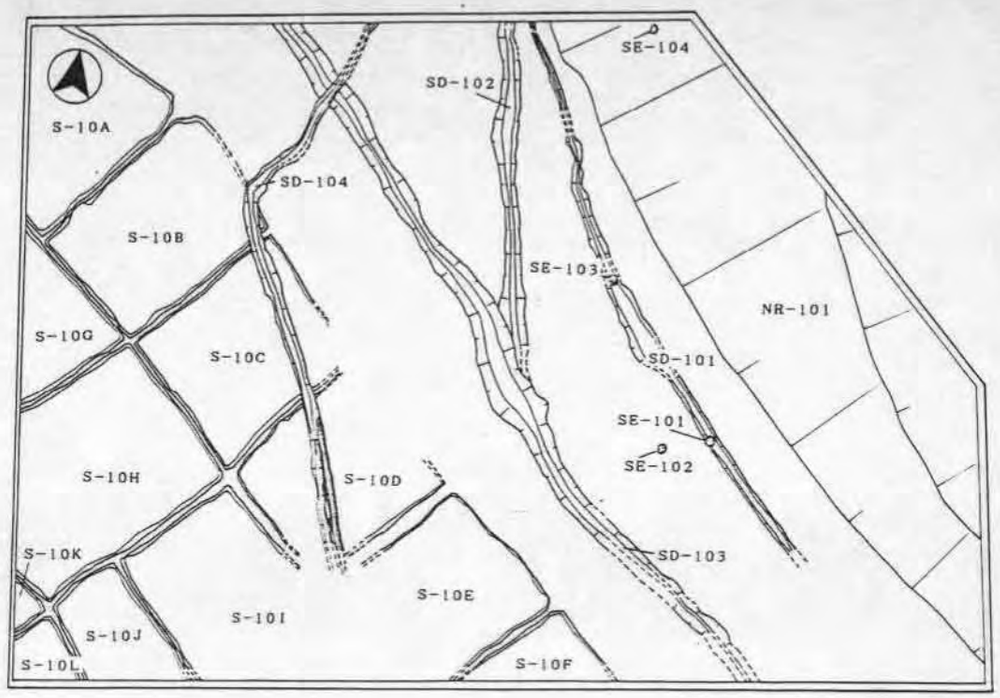


TG85-20
古墳時代前期の墓地
（縮尺1/500）

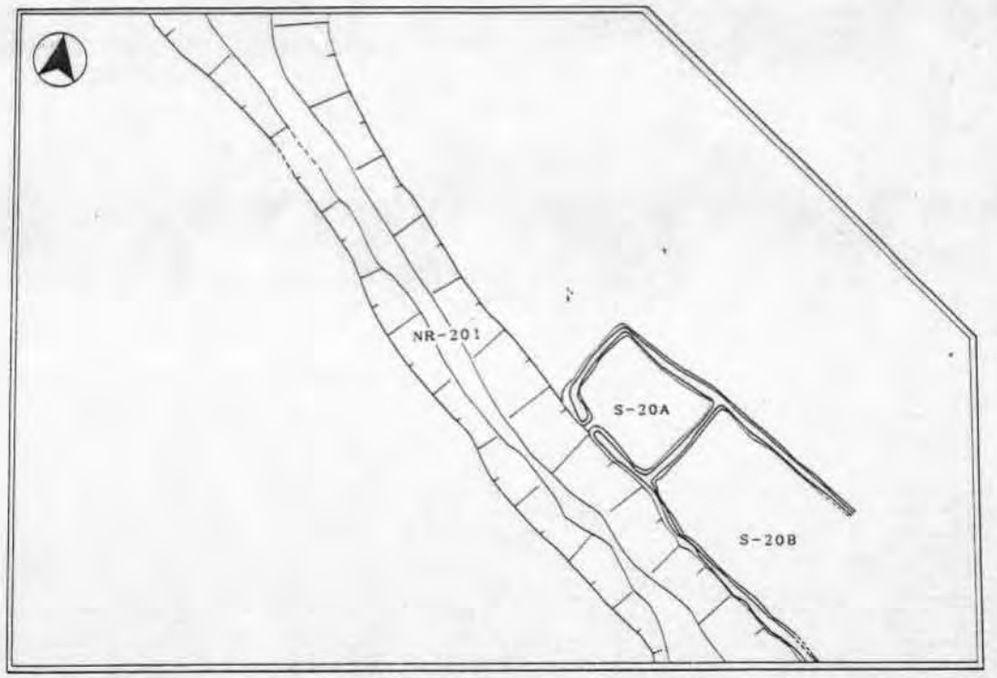
成法寺遺跡 S56年度調査地
古墳時代前期の墓地
古墳時代後期の居住地
（縮尺1/600）



西区－第１面



東区－第１面



東区－第２面